

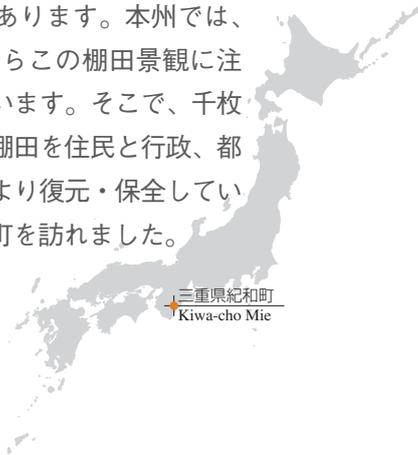
住民と行政による 千枚田の復活と保全

～三重県紀和町の取り組み～



美しい丸山千枚田の全景

建築物で構成される都市景観と対極にあるのが農村景観。北海道にも広大な農村景観があちこちに見られますが、北海道にはない農村景観の一つに棚田があります。本州では、10年ほど前からこの棚田景観に注目が集まっています。そこで、千枚田と呼ばれる棚田を住民と行政、都市との連携により復元・保全している三重県紀和町を訪れました。



関心が高まる棚田の風景

紀和町は、三重県南部の和歌山県と奈良県の県境にあるまちです。この辺りは、熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の熊野三山に通じる熊野古道があり、ひとたび山のなかに入ると静寂に包まれた空気に囲まれます。

1955年に三つの村が合併してできた紀和町には、奈良時代から鉱山の歴史があり、奈良の東大寺の大仏が建立されたときには、この辺りから大量の銅が供出されたといわれています。昭和に入り石原産業株式会社という民間企業によって銅鉱山開発が積極的に進められ、雇用の増大で人口も急増し、ピーク時には1万人を超える人々が住んでいました。しかし、'60年代に入り銅価格が低迷、鉱山経営の合理化が進められたことで人口流出が始まります。'78年に

は鉾山が閉山し、急激な過疎・高齢化をたどり、現在の人口は約1,800人、高齢化率は全国一（'02年9月末現在で51.52%）になっています。

紀和町には丸山千枚田と呼ばれる棚田があります。傾斜地に階段状に作られた多彩な形の田んぼは、季節や時間帯によってさまざまな表情があり、北海道の農村景観とは違った魅力があります。千枚田とは、田んぼが千枚もあるくらい多いこと、あるいは「狭い田」から千枚田と呼ばれるようになったようですが、本州には、紀和町だけでなく、石川県輪島市をはじめ、千枚田と呼ばれる棚田がいくつもあります。特に最近では全国棚田（千枚田）サミットが開催されるなど、棚田景観に注目が集まっているのです。

先人たちの財産を継承する強い思い

紀和町の丸山千枚田は、1601年には2,240枚、7.1haの田んぼがあったと記録されています。明治時代には11.3haまで面積が増え、戦後20年間はほぼこの規模で維持されてきました。しかし、'70年代に始まった稲作転換対策により、一部でスギの植林が行われるようになります。さらに'78年の鉾山閉山によって急激な過疎と高齢化が進み、耕作放棄が見られるようになります。2,000枚以上あった田んぼが、'92年には530枚にまで減少し、丸山地区の住民は危機感を抱くようになります。

一度、荒れ地になってしまうと、山間部で高齢化の進む地域では、もとに戻すことは難しくなります。農地が荒廃することの危ぐは、田んぼへの強いこだわりでもあります。傾斜地を利用して作ってきた棚田は、狭い土地を有効に活用し、1粒でも多くの米を収穫しようと努力してきた先人たちの歴史でもあります。流通があまり発達していない昔は、山間部の農地は大変貴重でしたから、その先代から受け継いだ農地をどんな形であれ、残したいと思うのは当然

です。大切な農地を自分の代で荒らしてしまっただけで申しわけないという気持ちは、歴史が浅い北海道の農家であっても同じでしょう。先祖代々続く丸山千枚田を守ってきたこの地域の農家にしてみれば、我々には計り知れない強い思いがあつて当然です。丸山千枚田は、この地域の人々にとって、誇りある資源なのです。

こうした事態を見かねた丸山地区の住民たちは、'93年の地区座談会で、千枚田の風景を復元しようと声を上げます。住民らは町に荒地を無条件で貸してほしいと申し入れ、地区の全24戸が参加して「丸山千枚田保存会」を結成します。そして、町とともに千枚田の復元・保全に取り組むことになったのです。

丸山千枚田条例の制定と千枚田の復元

紀和町では、'93年4月に町の全額出資による財団法人紀和町ふるさと公社を設立していました。それまで特別会計で運営していたキジの生産事業や特産物加工所などの事業を合体させ、農業者の高齢化と後継者不足による課題を都市との交流事業を含めて営農指導を行っていきこうという狙いで設立されたものです。丸山千枚田保存会が発足したことで、この公社が放棄地を借り上げ、保存会メンバーである地元農家を作業員に雇う形で、復田を開始させる体制が整い、早速'93年秋から復元作業に着手します。

一方、町では'94年に「紀和町丸山千枚田条例」を制定。この条例によって、千枚田の保護区域を指定し、区域内における所有者の移転や耕作内容の変更、工作物設置についての届け出を義務付けるとともに、保護区域内の所有者に対する助成などを定めました。地元農家の組織である保存会が千枚田の維持管理を行う実行部隊となり、行政は各種の事業などによって予算を確保し、公社が維持管理作業を行う事業主体となり、千枚田の復元が始まりました。ほぼ4年が

かりで810枚、2.4haの田んぼが復元されています。その結果、丸山千枚田は現在1,340枚、7.2haとなり、千枚田の名にふさわしい姿に復活しました。

明治時代に比べれば面積は少ないのですが、スギの植林が行われた田の復元は容易でないことや、維持管理の継続性を考慮して、これ以上の復元は当面実施しないこととなっています。田んぼと田んぼの間を仕切るあぜもビニールシートなどを使って省力化したものでなく、昔ながらの手法で、泥で塗ったあぜ塗りになっています。これは自然の美しさを演出し、日本の原風景を感じさせてくれます。このあぜ塗りは、農家がもともとその手法でやってきたのだからと自発的に行ったものだと思います。農家の人にしてみれば当然なのでしょうが、よく考えてみると、それこそが地域のこだわりで、地域文化が息づく景観が生まれているのだと思います。

小さなまちのメリットとデメリット

復田を進めることは、一方で減反という国の農業政策から見れば逆行する動きでもありました。しかし、紀和町内の総農家戸数はわずか140戸程度、うち自給的農家が約3分の2を占めています。このため、1戸当たりの平均農地面積は1haに満たないという小規模なもので、2.4haの復田をしたといっても、町内全体の減反目標の達成率は100%を軽く超える状況でした。1戸当たりの減反を指標とするのではなく、町内全体を指標とすることで、真正面から減反政策に対抗する必要はなかったようです。小さなまちの小さな規模でのメリットかもしれません。

一方で、小さなまちゆえのデメリットもあります。ほぼ無農薬に近い昔ながらの農法のため、取れ高の歩合は標準より低く、傾斜地に作られた小さな田んぼがほとんどなので機械化できない作業ばかりです。そこで問題となるのが労力です。田植え、草刈り、

稲刈りなどは保存会メンバーの高齢化もあり、すべてを保存会メンバーで行うことは難しいのです。

また、新たに復元した田んぼの維持管理費の問題もあります。高齢化した保存会メンバーがボランティアで維持管理をしていくことはやはり無理です。そこで、導入されたのが、オーナー制度でした。

オーナー制度と千枚田維持の資金

現在、丸山千枚田は1,340枚、7.2haの面積となっていますが、うち農家が個人で管理している部分は4.4ha、保存会が管理している部分が2.8haありま



オーナーが参加して田植えを行う田植え祭り



オーナーは千枚田荘に1,000円で宿泊できる

す。この2.8haの田んぼのうち、保存会が直接管理する1.6haを除いた1.2haを町外の人々にオーナーになってもらう制度です。

この制度は'96年から導入され、初年度は68組のオーナーを受け入れました。オーナーは、年間3万円をオーナー料として支払い、100m²の田んぼのオーナーとなります。町では、毎年春に田植え祭りを、秋に稲刈りの集いを行います。基本的にはこの作業に参加できる人がオーナーの条件です。遠距離や都合で参加できない場合には、町が管理してくれます。オーナーになると、丸山千枚田で生産された米15kgと、年に2回紀和町でとれた野菜や特産品を提供してくれます。丸山千枚田のなかにある宿泊施設「千枚田荘」を優先的に割引料金で利用することもできます。

オーナーは毎年100組募集しており、昨年の実績では地元の三重県が約5割、愛知・大阪・和歌山などの近隣府県のほか東京在住のオーナーもいました。3分の2がリピーターで、小さな子どもから70歳以上のお年寄りまで、さまざまな年代のオーナーが丸山千枚田を支えています。

オーナー制度の導入で、一定の労力と資金は確保できましたが、すべてをオーナー制度で賄うことはできません。労力については、オーナーと保存会メンバーに加えて、田植え準備や草刈り、稲刈りの準備や精米などを町職員や公社職員がサポートしています。

また、資金については、オーナー料に加え、'99年からは一口1万円の協力金を払って千枚田でとれた米1.5kgと機関紙の提供を受ける「丸山千枚田を守る会」もスタートさせ、この会費も維持管理に充てています。しかし、それだけでは、必要経費の3割にも満たないのが現状です。保存会が管理する2.8haの田んぼを維持していくためには、年間1,300万円ほどの維持管理費がかかっています。そのほとんどが千枚

田の管理委託費、要は作業労賃として、公社から保存会に対して支払われているものです。丸山千枚田を維持するために、国・県・町が出資して設立した基金を取り崩してこの事業に充て、さらに県の補助金や千枚田で収穫された米販売などでやりくりしていますが、それでも毎年300~400万円程度の資金が足りず、この分は町の持ち出しによって管理されているのが実態です。

町としてもこの持ち出しは厳しいものがあるようですが、丸山千枚田は県内だけでなく、全国的にも注目される存在となり、地方財政の厳しいなか、紀和町でも何とかまちの顔となった丸山千枚田を継承していこうと努力しているのです。

生産の現場でもある農村景観を守り、維持するためには「手間と費用がかかるのです。それほどの費用をかけないと維持できないのが現実です」と紀和町産業建設課農林係の松本健係長はいいます。

観光のまちを目指して

丸山地区住民の声にいち早く対処し、厳しい財政のなかでも財政措置を継続している背景には、紀和町が'79年に観光と福祉のまちへ政策転換を行ったことが背景にあります。鉱山閉山後に国が行っていた鉱床調査で、温泉が湧出したことを契機に、鉱山のまちから転身を図ることを打ち出したのです。町内には、熊野川の支流である北山川の溪谷「瀨峡」^{どろきょう}などの名所もあり、'97年には第二の温泉も湧出しています。

また、千枚田条例制定前後には景観保全を目的としたユニークな条例が制定されています。'90年には町内に生息するホタルを保護するために区域を指定し、ホタルの生育に必要な樹木や草の刈り取り、販売を目的としたホタル採集を禁止する「紀和町蛭保護育成条例」。'91年には日本の滝百選にも選ばれた



これまで「最も遠方のオーナーは沖縄県在住者でした」という松本係長

布引の滝周辺の森林を町が買い取り、樹木を切らずに保存して滝の景観を保持していこうという「紀和町きらずの森の設置及び管理に関する条例」。夕陽の景観が美しいと町内で評判だった学校の跡地の公園化を契機にその丘を良好な環境保全と施設整備を行っていこうという「紀和町夕陽の丘条例」（'96年制定）など、地域の思いや文化、風土などを生かしていこうというユニークな条例が多いのです。

いくつかの観光名所がある紀和町のなかでも丸山千枚田の景観が地域の集客ツールとして役立っていることは周知の事実。今では日帰りのバスツアーやカメラマンなどがやってくるようになり、年間の観光入り込み客数は約40万人といます。しかし、各種の条例などの取り組みがうまく連携できていないといった課題もあるといます。

農村景観保全の課題

紀和町でもご多分にもれず、周辺市町村と合併の議論が始まっています。しかし、合併議論のなかでも丸山千枚田に対する取り組みの継続は理解が得られているといます。一方で、保存会の高齢化、後継者不在という大きな課題がのしかかっています。現在、行政職員で丸山千枚田の保存部会が組織され、今後の対策を町長に提言することとなっているようですが、その話題の中心は、やはり後継者問題と経費抑制、増収の方策だといえます。

6月に文化庁の検討委員会がまとめた文化的景観の候補としてもリストに挙がっている丸山千枚田ですが、この点について松本係長は「紀和町としてはお断りする方針です。指定を受けると、史跡と同じような扱いになるのではないかと考えているからです。作業用に歩道を作ったり、東屋を建てることもできなくなります。都会の人が見れば、止まっているように見えても、千枚田は米を作るための田んぼで、

人間が手を加えなければいけないのです。毎年顔が違って当たり前なのです」と、農村景観が生産の現場であることを強調します。

農村景観は、農作業があり、日々変化していることを忘れてはなりません。そこに農村景観を守り、維持していくことの難しさと価値があるように思います。都市住民は、ただそれを鑑賞するだけでいいのでしょうか。例えば、農村景観に憩いややすらぎを感じたならば、景観を維持するために必要な資金や知恵を差し出すという姿勢が今求められているように思います。



日本の滝百選にも選ばれた布引の滝の入口。この周辺一帯が「きらずの森」に指定されている



丸山千枚田のなかで最も小さな田んぼ